

謠曲「景清」(作者不詳)

平家の侍大將の悪七兵衛景清は、源平が雌雄を決した屋島合戦で勇名を馳せるが、平家滅亡後、頼朝の命を狙つて捕へられ、敵の榮える世を見たくないとして自ら兩眼を扶り、日向の國に流された。そして今、里人の情けに縫すがつて露命ろめいを繫つなぎ、平家節へいけがしを謠うたつて老殘の日を送つてゐる。その日向に、人丸といふ名の美しい娘が従者と共にやつて來た。景清が嘗て遊女に産ませた娘で、父戀しさに遙々鎌倉から訪ねて來たのだ。主従が景清の行方を探してゐると、粗末な藁家の中から平家節を謠ふ聲がする。聲の主ぬしに、景清なる流人るじんの行方を問ふと、謠つてゐた景清は訪ねて來たのが娘と知つて驚くが、己が落魄らくはくの有様を恥ぢ、「名のらで歸す悲しさ」に涙しつつ、他を探すがよいと答へる。

やがて人丸達は里人に會ひ、藁屋の主が景清だと知らされ、里人と共に藁屋に立ち戻る。里人が、悪七兵衛景清殿はをられるかと呼ばはると、景清は、「今はこの世に亡きものと、思ひ

切りたる乞食こじきを、悪七兵衛景清などと呼ば「れるのは心外なり、まして昔の猛々たけだけしき「悪心は起こさじ」と決心してゐる身ではないか、と立腹するが、すぐに思ひ直して、恩誼ある里人への「片輪なる身」の詰らぬ言種いひぐま、「許しおはしませ」と謝る。そこで里人が、誰か訪ねて来なかつたかと訊ねると、景清は否定する。里人は、「偽りを仰せ」られるな、御息女が「あまりにおん痛はしさに」お供して来たものを、と云つて父娘の對面を促し、人丸が父の袖に手をかけると、景清は云ふ、「今までは包み隠すと思ひしに、顯あらはれけるか露の身の、置き所なや恥づかしや」、實は、「花の姿」の汝に父の名乗りをあげたのでは、乞食が父だと世間に知られ、汝の爲にならぬと思ひ黙つてゐたのだ、父を「恨みと思ふなよ」。

すると人丸は、屋島合戦の折の武勇談が聴きたいと云ふ。今の我には「似合はぬ所望」だと景清は云ひつつも、遙々やつて来た「心ざし」が不憫ゆゑ語つてやるが、語り終つたら故郷に戻れと云つて語り出す。義經に「一矢報いんものと、我は決死の覺悟で上陸し、押寄せる敵を斬り倒し、逃げる敵を逃さじとて、悪七兵衛景清なり」と「名のりかけ名のりかけ」て追ひ回し、名ある敵の首筋を覆ふ兜しころの鍔しころに手をかけて、「えいやと引く」と敵も必死に抗あひかひ、終に鍔がちぎれて逃げられた。何と汝の「腕の強き」と敵が云ひ、汝の「頸の骨こそ強けれ」と我は云つ

て、「笑ひて左右に退のきにける」。

語り終つた景清は、「己が辛苦の生涯も「末近し」、亡き跡の回向まがうを頼むと云つて娘を故郷に歸すのである。

日本で西洋の「tragedy」に當る作品を求めらば、能の『景清』など、極く少數のものしか無い」が、その「景清」さへ、「西洋の感じ方ではtragedyとは言ひ切れない點を含む」と小西甚一の「日本文藝史」にある。確かに、例へば前回のアイスキュロスのプロメテウスと景清とでは受ける印象が随分違ふ。倨傲きよがうにして豪膽がうたんな行動家プロメテウスに比して、景清は何と謙虚こまで情濃こまやかな主人公であらうか。無論、武勇談の景清は、小林秀雄が「平家物語」の宇治川先陣の場に見て取つた、「隆々たる筋肉の動き」や「わだかまりのない哄笑こうせう」といふ天晴れ武人の面目を呈してはゐる。だが、高橋義孝が云ふ様に、「謠曲のメロデー」は「短調」なのであつて、それが「悲哀感をからませた漠然とした無常觀」といふ、我々日本人の「全生活感情の底にあるものを最も的確に表出してゐる」（「能のすがた」）のだとすれば、「景清」もその例外とは云へぬ。プロメテウスやエイハブの殉ずる「能動性の榮光」（ニーチェ）は遂に我々のものではない。

〔謠曲集〕、新潮日本古典集成